

ゼミ・留学・ゼミ
99F-128 細谷彩子

「出会い」、大学でこんなにもたくさんの出会いがあるとは思ってもみなかった。そして、これだけ大きな出会いは人生にそうないのではないかと改めて感じている。それは、巖谷先生との出会いである。

先生のゼミに出はじめたのは3年のときからだ。気づくと先生の話にどんどん引きずりこまれていた。先生は学生と同じ視線に立って、どんどん興味の対象をひろげてくれていた。

私は忘れない。ある日ボソッと「パンに興味がある、パンの修業をしたい」と言ったら、先生は「やってみればいい!」というようなことをおっしゃった。それまではたいてい誰かに相談すると、「パン! ?」と変な顔をされたものだったのに。それで先生の言葉に背中を押され、紹介していただいた長谷川晶子さんというパン留学の先輩のおかげで、私にもやればできると思いはじめたのだ。

フランスに一人で渡ってから、先生の言葉ひとつひとつ、また授業でやっていたいろいろなことが、少しずつ点から線になっていった。

すぐ反応すること、おいしかったらすぐおいしいということ。先生の言うとおり、それが大事であるとわかった。日本にいたときと同じでは通用しないということを身をもって感じた。そして、ふとした光景を見てランボーの詩を思いうかべたり、留学先のルーアンの町を歩いていて先生の紀行書『フランスの不思議な町』の一節を思いおこしたり、モネの庭園や、ポンピドゥーセンターの現代美術館へ行っても、ゼミでやったこと、先生が言っていたことに気づいて思いにふけったりした。いろんなことがつながっている! と漠然と感じ、同時にどれだけ先生のおかげで見る世界がひろがっているのか、先生のすごさ(ありきたりの表現で申しわけないですが)をフランスでひしひしと感じていた。いま思えば、先生に出会っていなかったら留学や、ましてパンを学ぶという目的もどこかに行ってしまうていたかもしれない。

留学から帰ってきて、また先生の4年ゼミに戻れたことはとても幸いである。毎週の水曜日が楽しみだった。学生の希望にこたえてとりあげられるテーマは、テオ・アングロプロスの映画、ランボーの『永遠』、人形とアニメーション、土方巽や大野一雄の舞踏、庭園、ケルトの文化や伝説、昔話、メリュジーヌ、ランボーの『コント』とブルトンの『ナジャ』などだったが、どれも底のところでつながっていることがわかってきて、そのたびに感動させられた。

講義のあとには、各回のテーマに関係するいろんなジャンルの映画を見せていただいた。ルーアンでも毎週のように映画館に足を運んでいたことを思い出す。料金が安いということもあるが、スクリーンの前に座って「旅」をする快楽を、前年度の4年ゼミで知らないうちに覚えていたからだ。それは、1年のころに受講していた先生の「フランス研究」からはじめていた快楽かもしれない。映画＝ハリウッドというイメージが一気に壊されてしまい、ブニュエルやキエシロフスキやオーソン・ウェルズの世界にはじめて浸ったときの感動は大きかった。映像の美しさ、静けさ、妖しさ、すべてが新鮮だった。

そして、いまでも「旅」をしている感覚がある。ゼミとその周辺で新たな「出会い」をしているからだろうか。旅や庭園や瀧口修造をめぐる先生の講演会で出会ったゼミの卒業生たち、画廊・アートスペース美薔樹で知りあえた人たち、先生の写真作品、美術作品、等々が果てしなくひろがって、でもどこかでつながっているという感覚。これは先生の魔法なのだろうか、と不思議に感ずることすらある。さりげなくいろんな世界に目を向けさせ、導いてくれている先生に、なんと感謝していいかわからない。

いよいよ来月に、先生と、ゼミで出会った新しい仲間たち・卒業生たちとのアイルランド・ギリシア・パリ冒険旅行が始まる。いまから考えるだけでもドキドキしている。「何があるかわからない」のが旅だが、何がおこってもそれを逆に感動にかえられるような旅行になればと思っている。

2004 年 1 月